ラブカクテルス　その３８

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス　その３８

【Ｎコード】

Ｎ３１１０Ｄ

【作者名】

風　雷人

【あらすじ】

今宵は隣の世界が覗けるカクテルをお作りしました。ご賞味あれ。

いらっしゃいませ。
どうぞこちらへ。
本日はいかがなさいますか？
甘い香りのバイオレットフィズ？
それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？
はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。
少々お待ちください。
本日のカクテルの名前は未来お化けでございます。

ごゆっくりどうぞ。

私は科学者。
近年重ねた研究の末に、私は大発明をした。
そのおかげで大変な事になった。
お化け達が市民権を得たのだった。
それは霊が見える装置を作ってしまったことから始まった。

最初は人間が体から発する気を、映像化する研究から始まったのだが、実際その装置の試作を作ってレンズを覗いて見ると、そこにはいないはずの人が見えるのだった。
私はレンズの中とレンズの外を交互に見てみたが、やはり現実の世界にはないものがレンズの中にはあるらしかった。
私はどこかの風景が写っているのかも知れないと、レンズ意外の部分を黒い幕で覆い隠して、もう一度覗いてみた。

しかしやっぱりその人物ははっきりと、なぜか透き通って見えるのだった。
私は試しに、その人物にレンズを覗きながら声を掛けてみた。

もしもし、あなたはいったい誰ですか？
その人物はレンズの方に視線を合わせてきた。そして、凄い勢いでこちらを覗き込んで、自分が見えるのかと、聞いてきた。
私は答えた。
そうなんですよ。見えるんです。でもレンズの中だけなんです。
なぜでしょう？
するとその人物は、驚いて答えた。
それは自分が幽霊だからだと。
私はレンズから目を外した。そして、やはり目の前にその姿がないのを確認して、またレンズを覗く。
繰り返し繰り返しそんなことをするものだから、幽霊はしびれを切らした。
そして私に少し待ってなさいと、言うなり、現実の世界の方にわざわざ出てきてくれた。
うら～め～し～や～。
私は思わず悲鳴を上げたが、その幽霊がレンズの人物だったので、本当に幽霊か恐る恐る近づいて確かめることにした。
私はその人物にそっと触ってみた。すると私の手はその人物をすり抜けて、ひやりとした感覚を体に伝えてきた。
私はもう一度悲鳴をあげたが、冷めた幽霊の顔を見て、失礼しましたと謝った。
幽霊は、マジマジと私の作った装置を見ながら、貴方は大変な物を作ったみたいですね。と言って、少し慌てた顔をした。そして、悪魔様に知らせないとと言い残すと、ポワッと姿を消した。
私は色々聞きたい事があったので呼び止めたが、間に合わなかった。
取り残された私は、いきなり膝から力が抜けて、ガックリと座り込

んでしまったのだった。

私は早速その装置の改良を思い付いた。
初めの形は、昔の二眼レンズカメラとよく似ている姿で、レイザーの光に特殊な電波を掛け合わせて、空気中の目で見えない波長を色や形にして映し出す構造で、二つのレンズと少しの装置があれば作ることができる事から、あの出来事で幽霊の世界に興味を持った私は、メガネ型の物を試作で作ってみたのだった。
私はそれを掛けて外に出てみることにした。

研究所からしばらく大通りを歩いていると、ガードレールに腰を掛けて、足をブラブラさせている男の子を見かけた。
あんなところで何をしているのだろうと見ていると、その男の子はいきなり凄いスピードで走っている車に飛び込んだ。
私は驚き、恐さのあまりに身を縮めて目を閉じて、うずくまった。
しかしまた顔を上げるとその男の子は何もなかったかのように、ガードレールに腰掛けていた。
私は早速現れた幽霊に、体を固めた。
そしてそれが見えない振りをして通り過ぎようとすると、その私の行動が気になったらしく、幽霊の男の子はこちらをじっと見てこう言った。
この人僕が見えるのかな？
私は、見えてない見えてないと心で唱えた。
震える身体を何とか抑えつけて冷静を装って、吹けない口笛なんか吹いてすれ違った。
すると男の子幽霊はそんな私に、もしもし？と声を掛けてきた。
私は思わず小さな悲鳴をあげて足を止めてしまった。そして次の瞬間、私はメガネを外していた。
男の子幽霊の姿はそこにはなかった。
私は肩を落としてため息をついた。そして少し早足でその場を離れ

た。
驚くべきメガネの効果に、私は装置の成功を実感した。そしてある程度距離を置いたところで、またメガネを掛けて、さっきの男の子幽霊を電柱の影に隠れて様子を伺った。
男の子の幽霊はやはり、何回も何回も車に飛び込んは、ガードレールに戻る事を繰り返し、その行動は何だか切なく思えて仕方なくなってしまった。そして気が付くと、私は男の子の幽霊に声を掛けていたのだった。そんな私にはもう、恐怖の感情はなかった。
男の子の幽霊は驚く様子もなく、私のどうしての問いに、道の向こう側にママがいるから渡りたいんだけど、車がいつも邪魔をするんだと言った。
私は、きっとこの子が交通事故で亡くなったんだと思った。
そして私は男の子の幽霊に、それなら私が一緒に道を渡ってあげると、手を差し出した。
男の子の幽霊はありがとうと、嬉しそうに言いながら私の手を握ってきたが、感触はなく、冷たい感覚だけが手にあった。
私はそのまま優しく手を握る振りをして、少し離れていた横断歩道に行き、ゆっくりと反対の手を挙げて道路を渡った。
そして渡り切って手の方に目を向けると、男の子の幽霊はもう、いなくなっていた。
もちろん、向かいのガードレールの上にも。
私はほっとした感情と何か無情にこみあげてくる気持ちに、訳も分からず涙した。

それからしばらく立ち尽くしていると後ろの方から声がした。
振り返るとそこには、地面に胸から上だけ出した初老の男性が私に手招きしているのだった。
私は泣いていた事も忘れて、体を後ろに少し、だが俊敏に反らせて小さな悲鳴をあげた。
その変なのは、自分を幽霊だと名乗り、随分前にビルから飛び下り

たんだが、地面から体が抜けなくなったから引っ張ってほしいと言ってきた。
私は仕方なく手を貸すことにした。
私は手を出して掴んではみたが、やはり感触はなく、冷たい感覚だけ。しかし、何だか重さだけは感じるのだった。
しかし何回か力を入れて引っ張ってみたが、なかなかその重さはなくならなかった。
すると、私の心の中だろうか、何か映像のようなものが飛び込んできた。それはその幽霊の生前の記憶らしかった。

楽しく家族で過している場面から、次に飛び込んで来たのは、子供の過剰な反抗期に加えて、夫婦仲のもつれと同時に訪れたリストラ。
その上、身に覚えのない借金返済の請求。
きっと自殺に至るまでのその記憶が私の中へと入ってきたのだった。
私は思わずその気の毒さに泣いてしまった。
どうしようもない人生の一瞬の流れの変化が、一つの大きな流れになって重なってしまったせいで、人はあっという間に流されてしまうものなのだと、儚く思った。
すると、今まで感じていた重さがふっと消えて、私は入れていた力の反動のせいで反対に倒れた。
そして尻餅を付いた目の先にあったのは、歩道の敷タイルの目地に挟まっていた指輪だった。
大して飾りもない、少し光を失いかけている金色をしていた。
私が手を伸ばしてそれを取ろうとしたとき、その指輪は自然と転がり始めて、そして消えたのだった。

それから何人？かの幽霊と出くわし、その内私は幽霊が怖くなくなっていった。
意外に色々事情を抱えている幽霊が多く、私のことをどこかで聞い

たと、わざわざやってきては成仏するのに手を貸して、たまに癒され、たまに疲れ、たまに取り憑かれ、なかなか忙しい日々が訪れていた。

そんなある日、私の前に悪魔さんがやってきた。
彼はなかなかのいい男で、しかも紳士的な人？だった。
彼は、私のメガネのおかで、最近お化けの緊急総会が開かれ、今後の彼らの立場を考え直す会合をしたのだそうだ。
何しろお化けとは、人を脅かしてこその存在もいる訳で、このメガネが一般的に商品化したら、皆がお化けを怖がらなくなってしまう。
その事で、今からノイローゼになっているものまでいるらしく、ましてや現代科学の発展のせいで、かなりお化けの業界は苦しく、このままではお化けなんてやってられなくなるという意見が大変多かったそうだ。
そこで、お化け達は考えたらしい。共存という道を。
今まで姿を隠していたが、これからは堂々と生きていく。
しかし、すでに死んでいるものもいるのだが。
これまでは、その混乱が起きるのを恐れていたが、結局慣れてしまえばきっと大した事はないのだと結論に達したのだそうだ。
私は何と答えていいのか解らずに困っていると、とりあえず悪魔さんはいきなり私に取り憑いて、メガネを売りに出し始めたのだった。

メガネはすぐにインターネット上で話題になり、飛ぶように売れた。
そして街のあちこちでお化けの目撃が確認されて、そのうちテレビがそれに飛び付いた。
悪魔さんはその放送に合わせて何人かのテレビ受けしそうな幽霊を呼んで演出し、その番組は予想通りの高い視聴率で世界中に放送されたのだった。
人々は、すぐ隣にあるその別の世界の存在に驚き、悲鳴を挙げてシ

ョックのあまりにそのまま亡くなって、幽霊になる人までいたらしかった。
そしてその後、そのメガネの出処が話題になって、二、三日後には私だと分かってしまったらしく、悪魔さんに取り憑かれたままの私は、テレビ関係の報道陣に囲まれる羽目になった。
そしてその場でスラスラと会見で喋る私ではなく、悪魔さんがいた。
私の姿の悪魔さんは、巧みに世界の人々に、彼らの存在を受け入れるべきだと主張して熱く語り、共存の提案を示した。
私はそれから、かなりの注目を集めて、雑誌や新聞のインタビューを毎日のように対応し、大忙し。
自然とメガネを売ったことと合わせても、相当なお金持ちになってしまった。
私は心の隅っこで、満更でもない気分だった。
そして悪魔さんの戦略と努力が身を結び、世界中の人々も、あのメガネでお化け達に慣れてきたこともあって、お化けのこの世での存在を認める決議が、人間界で可決されることになった。
それに伴い、お化けによるお化けのためのお化けの政治まで確立された。
そしてお化け達は、差別から解放されて、いよいよ世間一般に、姿を一斉に見せる日が遂に決まり、とうとうその当日を迎えることとなったのだった。

人間界ではかなりの混乱が予想されたが、悪魔さんは今回のこっちとあっちとの出入口に選んだ銀座一丁目に、赤いカーペットを敷いて、わざと報道陣を利用して、とてもフォーマルな感覚に仕立ててその場を逆に盛り上げた。
そして正午の時計の音とともに何も無かった交差点の真ん中から扉の様に空間が開いた。
そして、いよいよ現れたお化け達は熱い視線の中、プレゼンのアナウンスとともに、にこやかに手を振って、まるでアカデミー賞候補

のハリウッドスター気取りで現れたのだった。
周りの人々は怖い物見たさと物珍しさに歓声を挙げて、悪魔さんの作戦通りにパニックなどは起こらなかった。
まるで銀座一丁目一帯は、パレードでも行われているように華やかになり、その日は世界中、この話題で持ちきりになったのだった。

それから暫くして街中にはまるで、観光でもするかのようにお化け達が徘徊し、あちこちで見られるようになった。
お化け達も実は、人間界の事を知っているようで、知らなかったり、色々興味があったのだった。
そんな事はヨソに、しばらくはそれが人間にも珍しく、お化けを見かけると、携帯のカメラでカシャリとやったり、一緒に記念撮影をしたりと、かなりの人気ぶりというか、興味の的になっていたのだった。
そんな中、悪魔さんは手早く次の行動に移り、以前から考えていたという策略で、少しとぼけた顔の妖怪を取り揃えて歌を歌わせ、妖怪のアイドル的な存在を登場させたのだった。
彼らはなかなかの芸達者で、物珍しさに弱い人間にはかなりの引きがあり、たちまちヒットチャートに踊り出る勢いで、当然それに伴ってグッズやＣＤも跳ぶように売れ、かなりの利益を上げた。
そして、それを資金に悪魔さんはプロモーターの会社を立ち上げ、その後テレビでは、死に別れてさまよう幽霊を連れてきて、その家族や恋人たちに再会させる番組を手掛けて、人々の涙を誘い、また感謝され、幽霊も番組の終わりに成仏していき、一石二鳥の企画となって、最後に司会のアナウンサーが言う、成仏！がチマタで流行り、あちこちで成仏成仏とはしゃぐ子供が見受けられた。
その他にも、かなりリアルなホラー映画を作り、もちろん本物の迫力には誰もが目を覆い恐怖して、これまた大ヒット。その年のアカデミー賞も獲得するほどだった。
それから悪魔さんは、お化け界からの人間界ツワー会社も設立し、

人間の綺麗な女の子をガイドに起用し、そちらの世界でもかなりの有名人となった。
しかし、そのうちにお化け達も、悪さをする族が出てくるようになり、悪魔さんは仕方なく人間界の警察に協力し、妖怪や幽霊の警察官をも配置し、人間とお化けのペア捜査官や、探偵社まで作り、大忙しになった。
そしてそんなおかげもあって、お化け達の犯罪は減り、そして社会的にお化け達は完全に受け入れたのだった。しかし問題は人間界の方にも影響が出て、それはかなり深刻な社会現象になった。それは自殺の急増だった。
お化け達がウケ始めたのを見た、今の人生に満足していない人々が、なんの迷いもなく進んで自殺を図るケースが増えたのだった。
それに対して、人間側の報道はお化け達を責め始めたが、悪魔さんは仕方なく、特別番組を組、人間が自殺したらどうなるかを特番で放送した。
悪魔さんの話では、自殺した人間は、そのまま魂を奪われて、二度とまた命にはなれなくなる。
そもそも死んだ霊は、悪い事をしていれば、その分の償いをするために地獄行き。
良い事をしていれば天国で次の命になるまでフカフカと優雅な時間を楽しく過ごし、順番が来たらまた、人間としての命になる。
お化け界の幽霊になれるのはごくごく稀で、かなりの怨念がある場合と、死んだ理由があまりに突然で、自分が死んだことに気づいてない人、もしくは、成仏し損ねた人がなる特別なものなのだそうだった。
そしてこれらの場合でさえ、タイミングが合えば成仏して天国か地獄に行く事になるのだそうだ。
私はそれを聞きながら、以前会った幽霊達を思い出し、なぜか、どうしているかと、懐かしく思うのだった。
そしてこれは、かなりの反響を呼び、視聴率は過去最高を塗り変え

て、人間達には衝撃とともに、今まではっきりしなかった答えを与え、一部安堵の声すら聞こえるほどの結果になり、次第に自殺する人は激減するほどの効果となった。
そしてその番組の後、生死の謎を知ったことからか、人間界のお化け達を見る目が少し変わり、親近感というか、この世界に本当に一緒に存在している仲間という意識が、強く認識されたような雰囲気が漂ったのだった。

そんな事があってからしばらくして時は流れ、私は悪魔さんと結婚した。
もちろん前代未聞の出来事にかなりの注目を集めたが、私はもう慣れっこだった。
そして二人の間には双子の男の子と女の子が生まれて、幸せな毎日が流れていた。
悪魔さんは相変わらず忙しそうだが、世の中はもう以前のようにお化けお化けと騒がなくなってはいたものの、やはり怖いもの見たさの精神は人間からはなくならずに、映画やテレビの受けは強く、業界は無くなってしまう心配などコレッぽっちも見せずに勢い付いていた。
しかも今や、企業的には世界でトップを争うくらいの好成績を維持し、悪魔さんは長者番付でもかなりの位置にいたのだった。
しかし彼は、お金なんて使う暇がないと苦笑して、欲の一つも見せずに働くのだった。
だがこの頃思うには、もしかしたら悪魔さんには人間と同じ欲望というものがないのではないかと、感じるのだ。
私にはとてもいい事だが。
何せ彼は不倫もしないし、お金にも執着はないし、私と子供への愛情はとても篤い。
昔の知識にある悪魔とは大違いだ。

でもこの先には何か裏があるんじゃないかと、いつもそう思う。
なにせ幸せすぎるのだから。悪魔と一緒にいるというのに。

今日もよく働いた。
しかし働くとはなんて面白いんだ。
やればやるほど色々なことが広がりを見せて繋がり、残っていく。
今までは、人間界を支配して、神に立てつく事ばかり考えていたが、
今から思えばくだらない。
その後何があると言うのだ。
きっとやっている間は苦しむ人間の顔を見ながら心底楽しい思いが
できたに違いないが、その後はどうだ？
苦しめる相手すらいない。
どこにいるのか分からない神を妬み、呪い、狙う、きりない一生の
どこが面白いのか？
俺がこの先楽しむのは人間界とお化け界を財と地位、権力と人気で
支配し、豪遊することだ。
さぞかし楽しいだろう。
皆俺に憧れ、敬い、妬み、そしていつの間にか使われて支配される。
人間が得意な最も残酷な手口。そしてこの世は俺の天国であり、他
の者達の地獄となる。
そして、きっと俺の二人の子供は新しいアダムとイヴになって、今
までにない世の中を創るだろう。
そこで俺は神として扱われ、後世にまで語り継がれる伝説の存在と
して君臨し続けるだろう。
なんて楽しみな未来だ。
なんて幸せな悪魔なんだ。
イヒヒヒ。

おしまい。

いかがでしたか？
今日のオススメのカクテルの味は。
またのご来店、心よりお待ち申し上げております。では。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3110d/

ラブカクテルス　その３８

2010年10月12日03時06分発行